

7月



(水戸八景 巖船の夕照：イバラキノートより)



(勤十堀：大洗町HPより)



あの日のあの川 リレー日記 ～第6話～

あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第6話主人公 小沼 良輔

(筑波大学大学院システム情報工学研究科博士前期課程1年 白川(直) 研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)
(出身地を流れる川：茨城県涸沼川)

『海の街の川』

いつのこと？：小学生時代

どこの川？：涸沼川^{ひぬま}

私の出身地は、茨城県の大洗町という海に隣接した町である。海水浴客は県下ナンバーワンであり、東日本大震災後に客数は減少したものの、平成13年には約40万人もの海水浴客が訪れた。また、大洗の町章は、「大洗」の「大」の字を図案化し、先端に大洗の象徴である波頭をつけたものであり、右に示す、町のマスコットキャラクターであるゆるキャラ「アライッペ」も、大洗特産の「シラス」や「ハマグリ」といった海産物をモチーフにしたものである。さらに、町のイベントとして地引網を行ったり、海の感謝祭という祭りを開催したりするなど、大洗では町として海を全面的に推している。



アライッペ

(大洗町HPより)

このような町で育ってきた私は、大洗といたら海！というイメージがとても強く、地元の河川について深く考えたこともなかった。しかし、大学院に進学し、それほど遠くもないが地元から離れ、また白川先生の研究室に所属して河川について学ぶようになってから、何気なく過ごしていた当たり前の日常の中で、川が身近にあったことを知った。そのことを知るようになった出来事の1つに、涸沼川の上流から河口まで辿ったフィールドトリップがある。

このフィールドトリップで涸沼川下流の大洗町を訪れた時、海の街大洗でも河川についての歴史があることを白川先生に教わった。例えば、水戸藩主徳川斉昭(烈公)が水戸八景として選定した「巖船の夕照(いわふねのせきしょう)」がある。この場所では、眼下で那珂川と涸沼川が合流し、はるかに筑

波山を望むことが出来る。ここは入口が木で覆われたトンネルのようになっており、私が小学生のころ秘密基地のような感覚で、放課後に兄や友人と駄菓子などを持ち寄って遊んでいた。また、目の前でトンビとカラスが争いを繰り広げ、恐怖しながらもその迫力に興奮していた思い出がある。

他にも、水戸藩が運河を掘ろうとした跡の勘十堀（かんじゅうぼり）がある。これは、「宝永年間（1704～1711年）、水戸藩が財政改革のため、松並勘十郎を起用し、江戸との水路として、鹿島灘・涸沼川・巴川の連絡を図って運河を掘りましたが失敗に帰した。大貫地内1キロメートル強の運河は数回にわたって埋め立てられ、現在は涸沼川に接するわずかな部分のみ残っている。（大洗町HPより）」というもので、現在はシジミ漁船などの係留施設となっている。この係留施設の近くには、田辺の渡し跡という渡船場の跡がある。川岸は沢山のシジミの貝殻で白くなっており、貝殻を踏みしめた時の何とも言えない感覚を未だに覚えている。

シジミと言えば、私の住んでいた地域では、涸沼で取れたシジミを自転車の荷台に乗せて売り歩いている方がいた。私の家にも時期によっては月に2度ほど立ち寄られ、学校帰りにその方を見かけると、「今日の晩御飯にシジミの味噌汁が出るかもしれない！」とわくわくしたものだ。このことを研究室の先輩に話したところ、自分の地域ではそのような人はいなかったと言われ、シジミを売りにきてくれないなんて、変わった地域に住んでいたのだなと思った。しかし、他の先輩方や友人に話すとみんな口をそろえて、そんな人はいなかったと驚かれ、シジミを売り歩くのは一般的ではなかったのか！と私自身が一番驚いた。

涸沼川沿いの公園にも思い出があった。その公園では友人がよく釣りをしており、私はそれをいつも眺めていた。一緒に釣りをしなかったのは、当時餌にしていたミズズが怖く触れなかったためである。ある日、台風が近づいているので川沿いの公園に近寄らない様にと学校の先生に忠告された。しかし、曇天で雨が降っていなかったためか、友人と私は有ろう事かその公園に遊びに行ってしまった。ところが公園近くに先生がおり、こっぴどく怒られた。どれほど怒られたかという、台風が近づいているときには二度と川に近づかないと心に誓うほどである。今考えると先生には命を救ってもらったといっても過言ではなく、なんて馬鹿なことをしたのだろうと思っている。

リレー日記を託されたとき、海の街出身の自分に川の思い出があるのだろうか心配していたが、研究室でのフィールドトリップとこの日記を通して、自分が育ってきた中で、川は海と同じくらい大きなものを残していると実感することが出来た。

（次は中原結衣さんにバトンを託します）



（いばらき web タウンより）